

Title	期間を表すマデと期限を表すマデ
Author	藪崎, 淳子
Citation	人文研究. 63 卷, p.27-49.
Issue Date	2012-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	中才敏郎教授 : 山口久和教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

期間を表すマデと期限を表すマデ

藪崎 淳子

助詞マデによる時間限定のし方には2種ある。「5時まで勉強する」は「勉強する」という動作が継続する「期間」を表すのに対し、「5時までに提出する」は「提出する」という点的な動作が実現する「期限」を表す。この「期間」と「期限」の差が生じる理由について、それは二の有無によるものであり、マデの働き自体は同じであるとする立場がある。これに対し本稿は、「期間」と「期限」の意味の差は、二の有無のみによるものではなく、述語のアスペクト的性質、並びにそれと連動したマデの働きの差の相互作用によって生じていることを明らかにする。

1. はじめに

助詞マデによる時間限定のし方には2種ある。

- (1) 5時^{まで}勉強する。
- (2) 5時^{まで}に提出する。

(1) はマデの示す「5時」に至る間、「勉強する」という動作が継続することを表すのに対し、(2) はマデの示す「5時」に至る間のいずれかの時点において、「提出する」という点的な動作が実現することを表す（本稿では(1)のような時間限定を「期間」、(2)のような時間限定を「期限」と呼ぶ）。同じマデによる時間限定でありながら、「期間」と「期限」という意味の差が生じる理由について、奥津（1966）、松木（1990）は、二の有無によるものであるとする。しかし、本当に両者の意味の差は二の有無のみによるものであり、マデの働きは同じなのであるだろうか。

- (1') 勉強するのは5時^{まで}だ。
- (2') 提出するのは5時^{まで}だ。

いずれも二を伴わないものの、(1') は「期間」、(2') は「期限」という意味の差がある。また、二を伴わずとも「期限」を表すこともあれば、二を伴っても「期間」を表すこともある。

- (3) 朝起きる^{まで}三度も目が覚めた。
- (4) あのCD絶対返してね。明日^{まで}よ!

(3) は「朝起きるまでに三度も目が覚めた」、(4) は「明日までにCDを返す」と同様の「期限」

を、二を伴わずとも表し得ている。

(5) 原子炉が停止するまでにかなりの水が漏れた (田野村2002: 57の(21)を改変)

(6) 母親の帰宅までに数時間子供を預かった。

(5)は「停止するまで漏れた」、(6)は「帰宅まで子供を預かった」と同様の「期間」を、二を伴っていても表し得ている⁽¹⁾。このように、二の有無は「期間」と「期限」の差に常に対応するわけではないことから、両者の意味の差は二の有無のみによるものではないと考えられる⁽²⁾。

以下では、「期間」を表す場合と「期限」を表す場合の述語のアスペクト的性質に着目して分析する。そして、「期間」と「期限」の差は、二の有無だけではなく、述語のアスペクト的性質、並びにそれと連動したマデの働きの差の相互作用によって生じていることを明らかにする。

2. 先行研究と問題の所在

永野(1964)、工藤(1995)は、「期間」と「期限」を表す場合では、述語のアスペクト的性質に異なるところがあるとし、その差について論じている。両氏の述語の分類方法は同じではないため、厳密には対応しないところもあるものの、その議論は概ね表1のようにまとめられる⁽³⁾。なお、本稿で述語の種類について言及する際には工藤の分類を用いる。また如何なる述語が「期間」と「期限」を表し得るのかを示すため、同じ述語を用いた例には同じ番号を付す。

【表1】永野(1964)と工藤(1995)の対照

述語	運動動詞			継続相 ⁽⁴⁾	状態性述語
	完成相				
	内的限界動詞		非内的限界動詞		
	主体変化動詞	主体動作客体変化動詞	主体動作動詞		
工藤(1995)	X		期間		X
	期限				X
述語	瞬間動詞	継続動詞		(継続相)	状態動詞 第四種動詞
永野(1964)	X		期間	(言及無)	期間
	期限				X

両氏の見解は大体のところは一致しているものの、表1に示したように、主体動作客体変化動詞が「期間」を表し得ると見るか否かについて主張に異なりがある。工藤は、運動動詞の完成相で「期間」を表し得るのは、主体動作動詞のみであり、主体変化動詞と主体動作客体変化動詞は「期間」を表し得ないとする⁽⁵⁾。これに対し永野は、主体動作客体変化動詞は「期間」

を表し得るとしている。

(7) 血が止まるまで傷口に布をあてる。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)

(8) 沸騰直前までスープをあたためる。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)

(7)の「あてる」、(8)の「あたためる」は主体動作客体変化動詞であるものの、動作継続の「期間」を表しており、永野の主張の通りである。ただし、永野の議論も十分とは言えない。なぜなら、主体動作客体変化動詞の全てが「期間」を表し得るわけではないからである。

(9) *明日まで殺す。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)

(10) *誕生日までプレゼントをあげる⁽⁶⁾。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)

また、永野は、主体変化動詞は「期間」を表し得ないとしているものの、

(11) 朝まで電気が点いていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)

(12) 夕方まで寝ていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)

のように、継続相をとれば「期間」を表し得る場合もあり、この点では継続相にも配慮した工藤の議論が参考となる⁽⁷⁾。ただし、運動動詞の継続相であれば常に「期間」を表すことができるというわけではない。

(9) *明日まで殺している。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)

(10) *誕生日までプレゼントをあげている。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)

(13) *明日まで死んでいる。(内的限界動詞・主体変化動詞)

(14) *10時まで会議が始まっている。(内的限界動詞・主体変化動詞)

(15) *昨日まで腐っていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)

(16) *再会するまで老けていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)

(9)～(16)はいずれも内的限界動詞である点は同じものの、(11)(12)は「期間」を表し得るのに対し、(9)(10)と(13)～(16)は「期間」を表すことができない。従って、継続相であれば常に「期間」を表し得るとする工藤の議論も、さらに精密化する必要がある。

ここまで運動動詞の場合を見てきたが、両氏の主張には当てはまらない場合があり、どのような運動動詞の場合に「期間」を表し得るのかは分らない。また、状態性述語についても両氏の議論には十分ではないところがある。表1に示したように、状態性述語は「期間」を表すことができるかとされているものの、

(17) この店は閉店までにぎやかだ。(状態性述語)

(18) *太郎は来春まで長男だ。(状態性述語)

のように、状態性述語の中にも「期間」を表し得るものと、そうでないものがある。もちろん、(18)の述語の「長男だ」が恒常的な性質を表すことからすれば、時間限定ができないのは当然といえる。しかし、「期間」を表し得る述語がどのような性質をもつのかを明らかにするには、(18)のような場合も含めた議論が必要であろう。

ここまで「期間」の場合を見てきた。次は「期限」の場合を見てみよう。

- (9) 明日^{まで}に 殺す/殺している。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)
- (10) 誕生日^{まで}に プレゼントを あげる/あげている。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞)
- (11) 朝^{まで}に 電気が 点く/点いている。(内的限界動詞・主体変化動詞)
- (12) 夕方^{まで}に 寝た/寝ていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)
- (13) 明日^{まで}に 死ぬ/死んでいる。(内的限界動詞・主体変化動詞)
- (14) 10時^{まで}に 会議が 始まる/始まっている。(内的限界動詞・主体変化動詞)
- (15) 昨日^{まで}に 腐った/腐っていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)
- (16) 再会する^{まで}に 老けた/老けていた。(内的限界動詞・主体変化動詞)
- (17) *この店は閉店^{まで}に ぎやかだ。(状態性述語)
- (18) *太郎は来春^{まで}に 長男だ。(状態性述語)
- (19) 5時^{まで}に 書類を 書く/書いている。(非内的限界動詞・主体動作動詞)
- (20) 食後30分^{まで}に 薬を 飲む/のんでいる。(非内的限界動詞・主体動作動詞)
- (21) *夕方^{まで}に ぶらつく/ぶらついている。(非内的限界動詞・主体動作動詞)
- (22) *警官が来る^{まで}に あばれる/あばれている。(非内的限界動詞・主体動作動詞)

表1に示したように、永野も工藤も運動動詞であれば全て「期限」を表し得るとしている。確かに、状態性述語の(17)(18)は「期限」を表し得ず、両氏の主張の通りである⁽⁸⁾。しかし、運動動詞であっても「期限」を表し得ないものもある。内的限界動詞である点で共通する(9)～(16)のうち、(9)(10)のような主体動作客体変化動詞はいずれも「期限」を表すことができるのに対し、主体変化動詞の中には(11)～(14)のように完成相でも継続相でも「期限」を表し得るものと、(15)(16)のように完成相では「期限」を表し難いものがある。また、(19)～(22)の非内的限界動詞を見ても、(19)(20)のように「期限」を表し得るものと、(21)(22)のようにそのままでは「期限」を表し難いものがある⁽⁹⁾。

以上述べたことは次の表2のように整理される。

【表2】 述語のアスペクト的性質と「期間」「期限」の関係

述語の性質	運動動詞						状態性述語 ¹⁰⁾		
	内的限界動詞			非内的限界動詞					
	主体変化動詞		主体動作客体変化動詞	主体動作動詞					
用例	(15)(16) 腐る A	(13)(14) 死ぬ B	(11)(12) 点く C	(9)(10) 殺す D	(7)(8) あてる E	(19)(20) 書く F	(21)(22) ぶらつく G	(17) ぎやかだ H	(18) 長男だ I
結果	X		期間	期間			X		
	(期限)	期間				(期限)	X		

* AとGの部分に()を付して「期限」としているのは、Aは継続相でなくては、Gは量を表す語句によって外的に限界づけなくては、それぞれ「期限」を表し難い点で他と異なるからである。

表2のA～Iは、「期間」と「期限」を表すか否かという観点から、工藤の述語の分類を下位分類したものである。表1と比べて明らかなように、「期間」と「期限」を表す述語のアスペクト的性質は、内的限界動詞か非内的限界動詞か、あるいは瞬間動詞か継続動詞かという従来の観点では説明し切れない。そこで次節では、それぞれどのような性質をもつ述語が「期間」あるいは「期限」を表し得るのかを考える。下に参考としてA～Iに属す語をあげておく。なお、Bは「期限」を表して「期間」を表さない主体変化動詞をまとめたものであるが、3.1.2で詳述するように、これは状態継続のあり方によって、さらに2種に分けられる。

【参考】

- A：腐る、傷む、はげる、やつれる、(色が) 褪せる、荒れる、熟れる、衰える、錆びる、老ける、惚ける、焦げる
- B：B1 死ぬ、卒業する、枯れる、(魚が) 焼ける、朽ちる、終わる、(岩が) 砕ける、萎れる、済む、出来あがる、滅びる、無くなる
- B2 始まる、(雨が) やむ、出発する、着く、呼び出す、(目が) 覚める、生まれる、到着する、引越す、(日が) 暮れる、(機械が) 直る、(柿が) 実る、よみがえる
- C：点く、消える、倒れる、あく、結婚する、寝る、(仕事に) 就く、入る、乗る、留まる、行く、来る、帰る、戻る、(雪が) 積る、増える、増す、高まる
- D：殺す、(プレゼントを) あげる、もらう、買う、払う、見つける、返す、提出する、届ける、建てる、(くじを) あてる、植える、失う、奪う、落とす、壊す、断つ、(ふたを) あける、(壁の時計を) 外す、(パースデーケーキのろうそくを) 消す、(招待状を) 出す、(財布にお金を) 入れる
- E：(布を) あてる、あたためる、焼く、かきまぜる、貸す、借りる、預かる、背負う、置く、掲げる、抱える、飾る、担ぐ、焦がす、煮る、(店を) あける、留める、止める、(席を) 外す、(店の灯を) 消す、(外に洗濯物を) 出す、(植木を家の中に) 入れる
- F：書く、食べる、読む、聞く、調べる、説明する、見る、話す、待つ、考える、歌う
- G：勉強する、ぶらつく、あばれる、歩く、走る、泳ぐ、笑う、働く、遊ぶ、思う、心配する、どきどきする⁽¹⁾
- H：にぎやかだ、元気だ、残業だ、子供だ、暑い、忙しい、若々しい
- I：長男だ、哺乳類だ、1 たす 1 は 2 だ、兄弟がいる、(富士山が) そびえている

3. 述語の性質

本節では、「期間」「期限」の順に、それぞれを表し得る述語の性質を考察する。

3.1 「期間」を表す場合

本節では「期間」を表す述語の性質について考えるが、考察の前に「期間」には2種あることを確認しておきたい。

(1) 5時^{まで}勉強する。(主体動作動詞・G) →動作継続

(7) 血が止まる^{まで}傷口に布をあてる。(主体動作客体変化動詞・E) →動作継続

(11) 朝まで電気が点いていた。(主体変化動詞・C) →状態継続

(17) この店は閉店までにぎやかだ。(状態性述語・H) →状態継続

(1) は「勉強する」、(7) は「(布を) あてる」という動作継続の「期間」を表す。一方、(11) は「(電気が) 点いている」、(17) は「にぎやかだ」という状態継続の「期間」を表す。このように、「期間」には、「動作継続の期間」と「状態継続の期間」の2種ある。動作継続を表すのは、主体動作動詞と主体動作客体変化動詞、状態継続を表すのは、主体変化動詞と状態性述語といえる⁽¹²⁾。以下では、動作継続と状態継続を表す場合を分け、順に見ていく。

3.1.1 動作継続の「期間」を表す場合

主体動作動詞と主体動作客体変化動詞は動作継続を表すとされる(工藤1995、金水2000)。

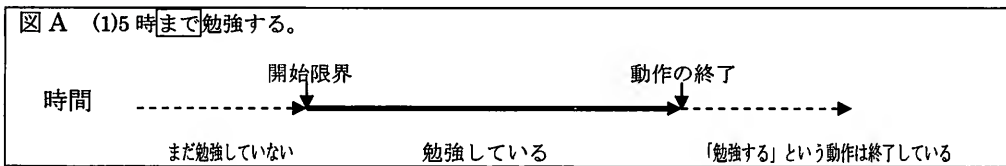
(1) 5時まで勉強する。(主体動作動詞・G)

(7) 血が止まるまで傷口に布をあてる。(主体動作客体変化動詞・E)

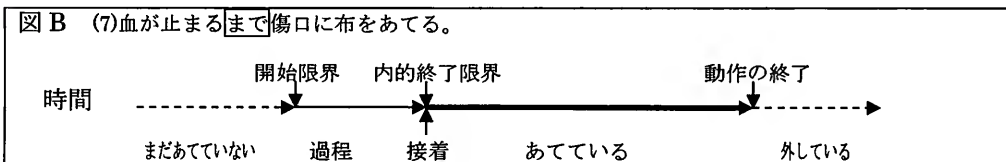
(9) *明日まで殺す。(主体動作客体変化動詞・D)

それは、「今勉強している最中だ」「今傷口に布をあてている最中だ」「今殺している最中だ」のように、「今～している最中だ」と言えることから裏づけられるとされる(金水2000: 19)。このテストによれば、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞は同じく動作継続を表すといえる。しかし、表2にも示したように、「期間」を表し得るか否かという点から見ると、(1)のような主体動作動詞は全て「期間」を表し得るのに対し、主体動作客体変化動詞の中には、(7)のように「期間」を表し得るものと、(9)のように「期間」を表し得ないものがある。では、(1)(7)と(9)は何が相違しているのだろうか。

まずは「期間」を表し得る(1)(7)から見ていこう。



「勉強する」はどのような状態になったら「勉強した」と言えるのか、動作が達成されると認識される終了限界が無い。そのため、開始限界を超えた後に継続する動作はマデの示す「5時」に至ってはじめて終了する。



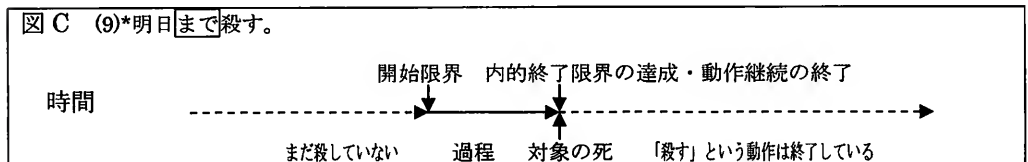
「あてる」は、布が傷口に接してはじめて「あてた」と言える内的限界動詞である。そのため、「布を手にし、それを傷口へ近づけていく」という過程を経て、「布が傷口に接する」と、内的

終了限界に達する。この内的終了限界達成後、すぐに「外す」こともできるが、なお続けて「あてる」こともできる。そして、この内的終了限界達成後に「あてた」状態を維持する動作は、マデの示す「血が止まる」時点に至って終了する。つまり、「あてる」という動作は、開始限界から内的終了限界に達する間だけではなく、内的終了限界達成後も継続でき、その動作継続は内的終了限界達成時とは別の新たな時点で終了する。次の(8)も(7)と同類である。

(8) 沸騰直前^{まで}スープをあたためる。(主体動作客体変化動詞・E)

「あたためる」は、“スープの入った鍋をヒーターの上に載せ、スイッチを入れて加熱する”という過程を経て、“あたたかいと感じる温度になる”と内的終了限界に達し、「冷めている」状態から「あたためた」状態へと変化する。この内的終了限界達成後、「スイッチを切る」こともできるが、なお続けて「あたためる」こともできる。対象であるスープに生じた変化を維持する場合、その動作はマデの示す「沸騰直前」に至って終了する。つまり、「あたためる」も、内的終了限界を超えた後にも動作の継続が可能であり、その動作は内的終了限界達成時とは別の時点に至って終了する。このように、「期間」を表し得る(1)(7)(8)は、内的終了限界達成時とは別の動作の終了時を有する点で共通している。

では次に、(7)(8)と同じ主体動作客体変化動詞であるにもかかわらず、「期間」を表し得ない(9)を見てみよう。



「殺す」は、“相手の首をつかんで力を加えていく”といった過程を経て、“相手が死亡する”と内的終了限界に達し、「殺した」といえる。ここまでは先の「あてる」「あたためる」と同じものの、「殺す」は内的終了限界を超えた後は、相手が複数いるといった多回の動作でない限り「殺し続ける」ことはできない。つまり、1回の「殺す」という動作は、開始限界から内的終了限界に至る間に限られ、それ以上の継続が不可能である。次の(10)も(9)と同じである。

(10) *誕生日^{まで}プレゼントをあげる。(主体動作客体変化動詞・D)

(10)の「あげる」は、“プレゼントを手にし、相手に差し出す”といった過程を経て、“相手がそれを受け取る”と内的終了限界に達し、「あげた」といえる。これも複数の人にプレゼントをあげるといった多回の動作でない限り、内的終了限界達成と同時に動作は終了し、それ以上の継続は不可能である。このように、「あげる」も「殺す」と同じく、開始限界から内的終了限界に至る間の動作継続しか表し得ず、内的終了限界達成時とは別の動作の終了時がない点で、先の(7)(8)とは異なる。

「勉強する」「あてる」「あたためる」「殺す」「あげる」は、語彙の意味に終了限界を内在しているか否かという点では、「勉強する」が異質で、「あてる」「あたためる」「殺す」「あげる」

が同類である。しかし、ここまで見たように、「あてる」「あたためる」は開始限界から内的終了限界へと至る間だけでなく、内的終了限界達成後も動作を継続することができ、内的終了限界達成時とは別の動作の終了時を有する点で「勉強する」と共通する。これに対し、「殺す」「あげる」は開始限界から内的終了限界へと至る間しか動作が継続することはなく、常に内的終了限界達成時が動作の終了時である点で異なる。こうした動作の終了時の他、動作継続の質という点でも異なりがある。「あてる」「あたためる」「殺す」「あげる」の表す、開始限界から内的終了限界へと至る動作は、“布を手にして傷口へ近づける”、“相手の首をつかんで力を加えていく”という、少しずつ異なる局面を見せるものであり、もしその状況をカメラで連写すれば、1枚1枚の写真に写る光景はそれぞれ異なっているであろう。これに対し、「あてる」「あたためる」の表す、内的終了限界達成後に継続する動作は、内的終了限界達成によって獲得された変化を維持するための動作といえ、その状況をカメラで連写しても、1枚1枚の写真に写る光景はどれもほぼ同じであろう。この点では、「勉強する」の表す動作も、様々な局面を見せる動作ではなく、“勉強している”という同じ状態を維持するための繰り返しの動作といえ、「あてる」「あたためる」の表す、内的終了限界達成後に継続する動作と類似している。つまり、「勉強する」と「殺す」「あげる」では動作継続の質が異なり、「あてる」「あたためる」はそうした質の異なる2種の動作継続を表す。このことが、同じ主体動作客体変化動詞であっても、「殺す」「あげる」と「あてる」「あたためる」が「期間」を表し得るか否かという点で差が生じる要因となっているのである⁽¹³⁾。

以上、動作継続の「期間」を表す場合について見てきたことは、次のように整理される。

【表3】動作継続の「期間」と述語の性質

述語の種類			内的終了限界へ至る動作継続	維持動作の継続	動作継続の期間
内的限界動詞	主体変化動詞	ABC	死ぬ	—	—
	主体動作客体変化動詞	D	殺す	+	—
		E	あてる	+	+
非内的限界動詞	主体動作動詞	FG	勉強する	—	+
状態性述語			HI	にぎやかだ	—

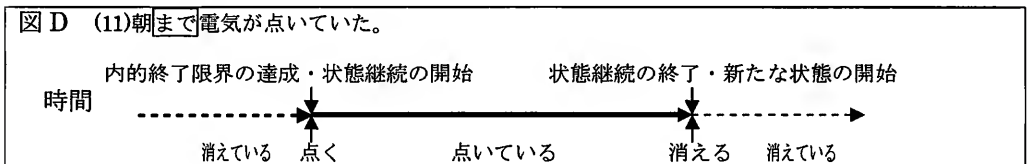
動作継続を表し得るのは、主体動作動詞と、主体動作客体変化動詞である。主体動作客体変化動詞には、「殺す」のように内的終了限界に達すると同時に終了する動作を表し、内的終了限界へと至る動作継続しか表し得ないものと、「あてる」のように内的終了限界へと至る動作継続を表すだけでなく、内的終了限界達成後に得られた状態を維持する、維持動作の継続も表すものがある。後者は維持動作の継続を表し、またその継続には終了限界を内在しない点で、主体動作動詞と共通する。従って、動作継続の「期間」を表す述語は、終了限界を内在しない維持動作の継続を表すものであることが分かる。

3.1.2 状態継続の「期間」を表す場合

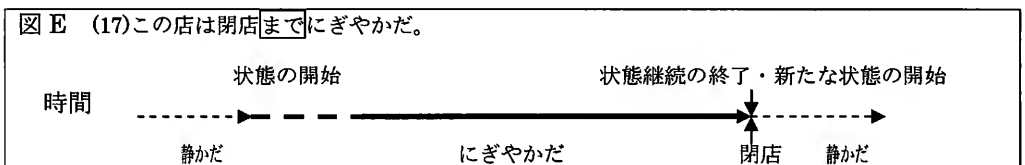
3.1.1では、動作継続の「期間」を表す場合を見た。次に見たいのは、状態継続の「期間」を表す場合である。状態継続を表し得るのは、主体変化動詞と状態性述語である。しかし、表2にも示したように、主体変化動詞、状態性述語であれば常に状態継続の「期間」を表し得るわけではない。

- (11) 朝^{まで}電気が点いていた。(主体変化動詞・C)
- (13) *明日^{まで}死んでいる。(主体変化動詞・B1)
- (14) *10時^{まで}会議が始まっている。(主体変化動詞・B2)
- (15) *昨日^{まで}腐っていた。(主体変化動詞・A)
- (17) この店は閉店^{まで}にぎやかだ。(状態性述語・H)
- (18) *太郎は来春^{まで}長男だ。(状態性述語・I)

同じ主体変化動詞でも、(11)と(13)～(15)では異なり、また同じ状態性述語でも(17)と(18)では異なる。こうした差は何によるものなのか、「期間」を表し得る(11)(17)から見てみよう。

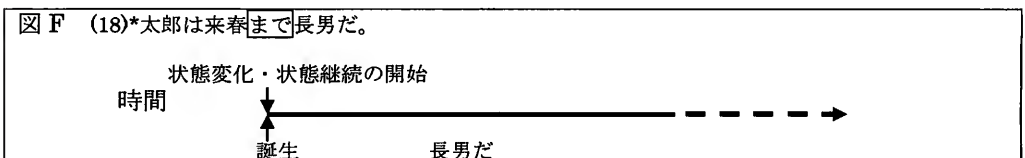


「点く」の表す動作そのものは、開始とほぼ同時に終了限界に達し、継続しない。しかし、図Dに示したように、内的終了限界達成後には、動作の結果状態が継続する。この状態継続には終了限界が内在されていないため、マデの示す「朝」に「消える」という変化が生じることで終了する。これとほぼ同じことが、次の状態性述語の場合にもいえる。

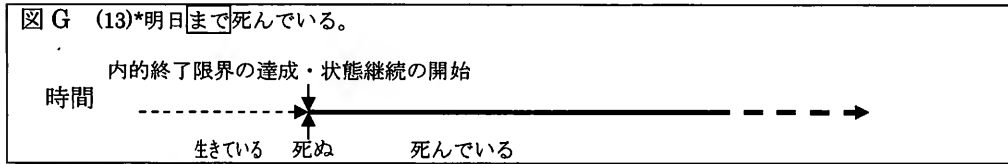


図Eに示したように、「静かだ」という状態継続の後、漸次的に「にぎやかだ」という状態へと変化する。その後継続する「にぎやかだ」という状態には内的終了限界はない。そのため、マデの示す「閉店」の時点に至り、「静かだ」という新たな状態へと移行することで、「にぎやかだ」という状態継続は終了する。このように、(11)と(17)は述語の種類は異なるものの、終了限界を内在しない状態継続を表し、その状態継続が新たな変化の生起によって終了する点で同じである。

では次に、(11)(17)と同類の述語でありながら、「期間」を表し難い場合を見てみよう。



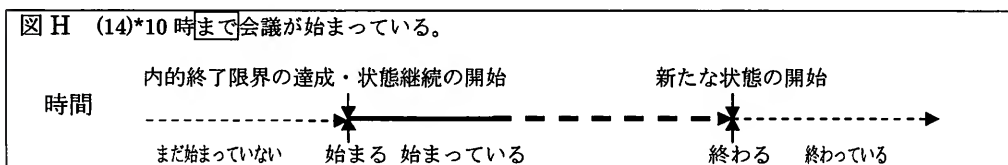
「長男だ」の表す状態は、「太郎」の誕生と同時に開始し継続する。このように、変化によって獲得した状態の継続を表す点で、「長男だ」は「にぎやかだ」と同じである。しかし、「長男だ」の表す状態は恒常的で、終了することなく継続する。この点で、「にぎやかだ」が終了する余地のある状態継続を表すのとは異なる。無時間的な状態性述語は、状態継続に開始の時点がない点では「長男だ」と差があるものの、状態継続に終了時がないという点では同じである。同様のことは、(13)の「死ぬ」にも言える。



「死ぬ」という動作は開始とともに内的終了限界に達する。その後「死んでいる」という結果状態が継続する点では「点く」と同じである。しかし、「死ぬ」の結果状態は、その「死」が演技でもない限り再び変化以前の「生きています」状態に戻ることはできず、結果状態の継続は終了することがない。この点で、「点く」であれば「消える」という変化によって状態継続に終了する余地のあるのとは異なる。この「死ぬ」と近いものに(15)の「腐る」があげられる。

(15)*昨日まで腐っていた。

「腐る」は新鮮な状態からそうでない状態への漸次的な変化を表す。消費期限を示すこともできるものの、どの瞬間から「腐った」といえるのか、内的終了限界の達成時が明確とは言い難い。また、内的終了限界達成後の状態は進展性を有し、「少し腐った」状態から「かなり腐った」状態へと動的に変化し、「死ぬ」の結果状態が静的であるのとは異なる。このように、「死ぬ」と「腐る」のアスペクト的性質には異なる点もあるものの、一度死んだら再び生きています状態に戻ることはできないのと同じように、一度腐ったものは再び新鮮な状態に戻ることはできず、終了限界達成後の状態継続に終了する余地がないという点では共通している。このように、「長男だ」「死ぬ」「腐る」の表す状態継続には終了する余地がない点で、「点く」「にぎやかだ」とは異なる。では、(14)はどうであろうか。



「始まる」という動作は開始と同時に内的終了限界に達し、その後「始まっている」という結果状態が継続する。この状態は「終わる」という変化が生じることで終了する余地があり、先の「長男だ」「死ぬ」「腐る」の表す状態継続に、終了する余地がないのとは異なる。では、なぜ「始まる」は「期間」を表し得ないのか。その理由を考えるべく、これと「期間」を表し得る「点く」を比べてみよう。「点く」の結果状態は「消える」という変化の生起時まで継続す

るのに対し、「始まる」の結果状態は「終わる」という新たな変化の生起時までは継続しない。このことは、会議が10時に開始し、12時に終了すると仮定した場合、10時の開始からしばらくは「(会議が) 始まっている」と言えるものの、12時の終了間際に「(会議が) 始まっている」とは言えないことから裏づけられる。つまり、「点く」は新たな変化の生起が即ち状態継続の終了であるため、いつ状態継続が終了するのか、その終了時を明確に捉えられるのに対し、「始まる」は新たな変化の生起に先行して状態継続が終了するため、いつ状態継続が終了するのか、その終了時を捉え難い点で異なっている。

以上、状態継続の「期間」を表す場合について見てきたことは、次のように整理される。

【表4】状態継続の「期間」と述語の性質

述語の種類			状態継続	状態継続の 終了余地	状態継続 の終了時 の明確性	状態継続 の期間
内的限界動詞	主体変化動詞	AB1	腐る、死ぬ	+	-	-
		B2	始まる	+	+	-
		C	点く	+	+	+
	主体動作客体変化動詞	DE	あてる	-	-	-
非内的限界動詞	主体動作動詞	FG	勉強する	-	-	-
状態性述語			H	にぎやかだ	+	+
			I	長男だ	+	-

主体変化動詞と状態性述語は、状態継続を表し得る。しかし、これらの表す状態継続は一様ではなく、中には「点く」「にぎやかだ」のように新たな変化の生起に伴い状態継続が終了し、その終了時が明確なものと、「腐る」「死ぬ」「長男だ」のように状態継続に終了する余地のないもの、あるいは「始まる」のように状態継続に終了する余地はあるものの、その終了時が明確ではないものがある。このうち、「期間」を表し得るのは、状態継続に終了の余地があり、かつその終了時が明確な場合である。「期間」が開始から終了に至る時間の幅を表すことに鑑みれば、終了時がない状態継続、あるいは終了時が不明確な状態継続を表す述語となじまないことは、容易に理解されよう。

3.1.3 動作継続と状態継続の「期間」

ここまで、動作継続と状態継続の「期間」を表す場合を順に見てきた。動作継続の「期間」を表し得る述語は、終了限界を内在しない維持動作の継続を表す。一方、状態継続の「期間」を表し得る述語は、終了限界は内在しないものの、明確な終了時を有する状態継続を表す。終了時が明確か否かという点からみれば、動作継続を表す場合はその動作をやめれば必ず元の状態に戻り、常に終了時は明確である⁽¹⁴⁾。

以上から、「期間」を表し得る述語は、明確な終了時を有するものの、それ自体には終了限界を内在しない動作・状態の継続を表すものであることが分かる。

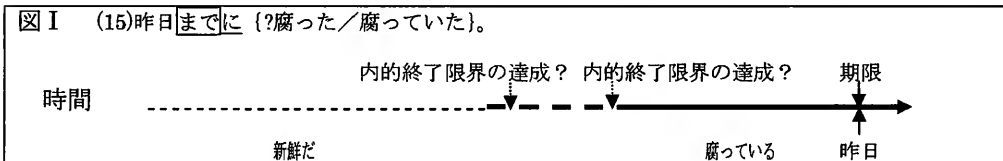
3.2「期限」を表す場合

本節では「期限」を表す述語の性質について考えるが、考察の前に、マデの表す「期限」とは何の期限であるのかを確認しておこう。たとえば、「6時までに宿題をやりなさい」と言われた場合、私たちは6時以前に宿題をやり終えなければならない。従って、マデが表すのは終了限界達成の期限である。このことに鑑みると、終了限界を内在する内的限界動詞であれば、その「期限」を示すことができると予想される。

- (9) 明日までに 殺す/殺している。(内的限界動詞・主体動作客体変化動詞・D)
- (11) 朝までに電気が 点く/点いている。(内的限界動詞・主体変化動詞・C)
- (13) 明日までに 死ぬ/死んでいる。(内的限界動詞・主体変化動詞・B)
- (15) 昨日までに 腐った/腐っていた。(内的限界動詞・主体変化動詞・A)
- (19) 5時までに書類を 書く/書いている。(非内的限界動詞・主体動作動詞・F)
- (21) *夕方までに ぶらつく/ぶらついている。(非内的限界動詞・主体動作動詞・G)

しかし、2節で見たように、(9)のような主体動作客体変化動詞は全て「期限」を表し得るのに対し、主体変化動詞の中には(15)のように継続相でなくては「期限」を表し難いものもある。また、終了限界を内在しない主体動作動詞の中にも、(19)のように「期限」を表し得るものもある。では、どのような場合に「期限」を表し得るのか、まずは内的限界動詞の場合から見ていこう。

(11)の「点く」、(13)の「死ぬ」、(15)の「腐る」は終了限界を内在し、マデの示す時点とは無関係に、その終了限界の達成を表す点は同じである。しかし、「点く」「死ぬ」は、それぞれ“明るくなる”、“息が絶える”など、内的終了限界に達する瞬間が明確であり、その時点を示すこともできる。これに対し「腐る」は、図Iに示したように、新鮮な状態から、臭いがする、変色するなどして、明らかに「腐った」と判断できる状態への変化が漸次的であり、どの瞬間に腐っていない状態から腐った状態へと変化したのか、内的終了限界の達成時が明確ではない。

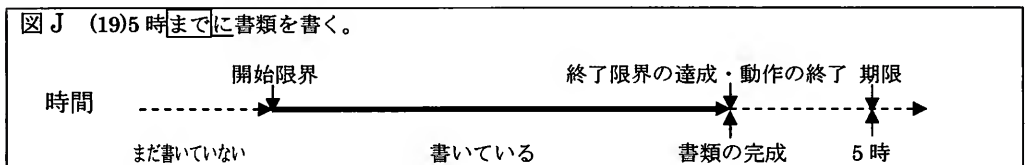


「期限」は、完成相との結びつきの場合、それに先行して終了限界を達成しているか否かを問うため、内的終了限界の達成時が明確な「点く」「死ぬ」はその「期限」を示し得るものの、それが不明確な「腐る」は「期限」を示し難いのだと考えられる。ただし、継続相の場合は、運動後の効力が設定時において捉えられればパーフェクトを表す文として成り立つ。つまり、「腐っている」という内的終了限界達成後の効力が、「期限」の示す時点において認識できればよい。「腐る」は終了限界の達成時は不明確なものの、「期限」の示す時点において結果状態の

継続を認識できることから、継続相であれば「期限」となじむのである。次の(16)も同じである。

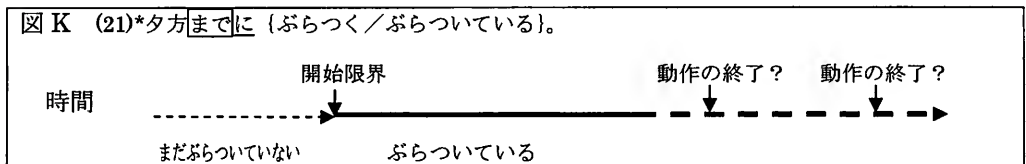
(16) 再会するまでに {老けた/老けていた}。(内的限界動詞・主体変化動詞・A)
 「老ける」も、若々しい状態から「老けた」状態への変化は漸次的であり、いつから「老けた」と言えるのか、内的終了限界の達成時が明確ではないため、完成相では「期限」を示し難い。しかし、内的終了限界達成後には結果状態が継続するため、「期限」が示す時点において動作の終了後の効力を捉えられるか否かを問う継続相であれば許容される。

ここまでは内的限界動詞の場合を見てきた。次に見る非内的限界動詞は、どのようにしたらその運動が達成されたとみなせるのが語彙の意味に含まれず、終了限界の達成時が明らかではない。ならば非内的限界動詞は「期限」となじみ難いと予想されるものの、先に見たように「期限」を表し得るものも存在する。



「書く」というとき、私たちは無目的に「書く」こともあるが、「書類を書く」など、目的をもって書くこともある。そして、「書類を書く」は書類の記入が全て済むと「書類を書いた」と言え、動作が達成されたと認識される。同様のことは(20)にも言える。

(20) 食後30分までに薬を {のむ/のんでいる}。(非内的限界動詞・主体動作動詞・F)
 「薬をのむ」は、定量の薬を服用すると、動作が達成されたと認識され、「薬をのんだ」と言える。このように、「書く」「のむ」は非内的限界動詞であるものの、対象と結びつくことによって終了限界を有する。そのため、終了限界達成の「期限」を表し得るのである。これに対し、次の「ぶらつく」はどんなに長時間その動作を継続しても、「書く」「のむ」が対象との結びつきによって有するような終了限界は持ち得ない。

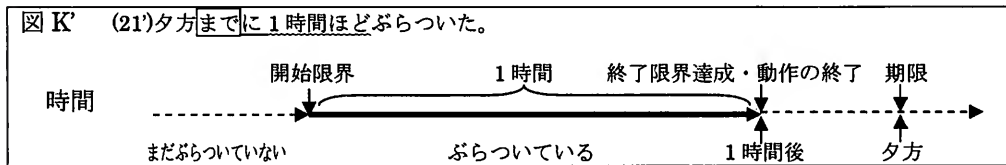


同様に、

(22) *警官が来るまでに {あばれる/あばれている}。(非内的限界動詞・主体動作動詞・G)
 も、どのようにしたら動作が達成されたとみなせるのが不明確であり、また動作の終了後にその効力を捉えることも難しい。そのため、完成相と継続相のいずれの場合も「期限」となじまないのだと考えられる。このように、非内的限界動詞の中には、「書く」「のむ」のように必須成分と結びつくことで終了限界を有して内的限界動詞に近接する、有界性(上野、影山

2001) のあるものと、「ぶらつく」「あばれる」のように有界性がないため、必須成分と結びついても終了限界を有し得ず、また動作の終了後の効力も捉え難い点で、内的限界動詞と大きく異なるものがあり、その差が「期限」を表し得るか否かに関係している⁽¹⁵⁾。

ただし、「ぶらつく」「あばれる」のように、必須成分との結びつきに終了限界を有さない動詞であっても、量を表す語句によって終了限界を外的に付与することは可能である(工藤1995、金水2000)。



(21) のように、「ぶらつく」も「1時間ほど」のような語句によって動作の量を規定すれば、その量を満たすことで動作が達成されたと認識される⁽¹⁶⁾。そのため、終了限界達成の「期限」を表すことも可能となる。量を表す語句によって外的に動作を限界づける場合も含めば、主体動作動詞はいずれも動作の終了限界を有することができ、その達成の「期限」を表すこともできる。

以上、「期限」を表す場合について見てきたことは、次のように整理される。

【表5】「期限」と述語の性質

述語の種類			内的終了限界	有界性	限界達成時の明確性	動作後の効力	期限
内的限界動詞	主体変化動詞	A 腐る	+	+	-	+	(+)
		BC 死ぬ、点く	+	+	+	+	+
	主体動作客体変化動詞	DE 殺す	+	+	+	+	+
非内的限界動詞	主体動作動詞	F 書く	-	+	+	+	+
		G ぶらつく	-	(+)	(+)	(+)	(+)
状態性述語		HI にぎやかだ	-	-	-	-	-

* Aに()を付しているのは、継続相でなくては「期限」を表し難い点で他と異なるからであり、Gに()を付しているのは、量を表す語句によって外的に限界づけなくてはそれぞれの性質を有さず、また「期限」を表し難い点で他と異なるからである。

「期限」とは終了限界がそれに先行、あるいは同時に達成されることを表す。そのため、述語あるいは述語と文の成分との組み合わせに終了限界を有していなくては「期限」を示すことはできない。また、終了限界達成の瞬間の時点が明確でなくてはならないため、内的限界動詞であっても「腐る」のように終了限界の達成時が明確ではないものは、完成相では「期限」を表し難い。ただし、継続相の場合は「期限」の示す時点において終了限界達成後の効力が認識できればよいことから、「腐る」のように終了限界の達成時が明確ではないものも継続相をとることで「期限」を表すことができる。一方、非内的限界動詞は語彙的意味には終了限界を内在しないものの、「書類を書く」のように、必須成分と結びつくことによって終了限界を有する、

有界性のあるものもあり、これらは量を表す語句によって外的に限界づけなくとも「期限」を表し得る。一方、「ぶらつく」のように有界性のない動詞は、必須成分と結びついても終了限界を有し得ないため、そのままでは「期限」を表すことはできず、量を表す語句によって外的に終了限界を付与してはじめて「期限」を表すことが可能となる。こうした運動動詞に対し、状態性述語は時間的限界性を有さないため⁽¹⁷⁾、「期限」は表し得ない。以上から、「期限」を表し得る述語は、述語それ自体、あるいは述語と文の他の成分との組み合わせに、終了限界を有する場合であることが分かる。

3.3 まとめ

以上、「期間」と「期限」を表し得る述語のアスペクト的性質をそれぞれ考察した。考察の結果は、次のようにまとめられる。

【表2】述語のアスペクト的性質と「期間」「期限」の関係¹⁸

述語の性質	運動動詞								状態性述語		
	内的限界動詞				非内的限界動詞						
	主体変化動詞				主体動作客体変化動詞		主体動作動詞		にぎやかだ H	長男だ I	
	腐る A	死ぬ B1	始まる B2	点く C	殺す D	あてる E	書く F	ぶらつく G			
内的終了限界へ至る動作継続	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-	
維持動作の継続	-	-	-	-	-	+	+	+	-	-	
状態継続	+	+	+	+	-	-	-	-	+	+	
動作・状態継続の終了余地	-	-	+	+	+	+	+	+	+	-	
動作・状態継続の終了時の明確性	-	-	-	+	+	+	+	+	+	-	
内的終了限界	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	
有界性	+	+	+	+	+	+	+	(+)	-	-	
限界達成時の明確性	-	+	+	+	+	+	+	(+)	-	-	
動作後の効力	+	+	+	+	+	+	+	(+)	-	-	
「期間」と「期限」	期間				期間				期間	期間	
	(期限)	期限						(期限)	(期限)		

* Aに()を付しているのは、継続相でなくては「期限」を表し難い点で他と異なるからであり、Gに()を付しているのは、量を表す語句によって外的に限界づけなくてはそれぞれの性質を有さず、また「期限」を表し難い点で他と異なるからである。

斜線で示した「期間」には、右上がりの斜線で示した動作継続の「期間」を表すものと、左上がりの斜線で示した状態継続の「期間」を表すものがある。動作継続の「期間」を表す述語は、終了限界を内在しない維持動作の継続を表し、状態継続の「期間」を表す述語は、終了限界を内在しないものの、ある明確な時点に至って終了する余地のある状態継続を表す。動作継続、状態継続のいずれも、「期間」を表す述語は終了限界を内在しない動作・状態継続が、ある明確な時点に至って終了することを表す。一方、網かけで示した「期限」を表す述語には、継続

相でなくては「期限」を表し難いものと、完成相でも「期限」を表し得るもの、あるいは量を表す語句によって外的に限界づけた場合にのみ「期限」を表し得るものがある。いずれも「期限」を表す述語は、述語それ自体、あるいは述語と文の他の成分との組み合わせに終了限界を有し、動作の達成を表す。

4. マデの働き

3節では、「期間」と「期限」を表す述語のアスペクト的性質について考察した。本節では、これらと結びつくマデの働きについて考えたい。

先にも触れたように、量を表す語句は語彙の意味に終了限界を内在しない動詞を限界づけることができる。この外的終了限界の付与が可能な語句の1つとして、工藤（1995）、金水（2000）はマデをあげている。

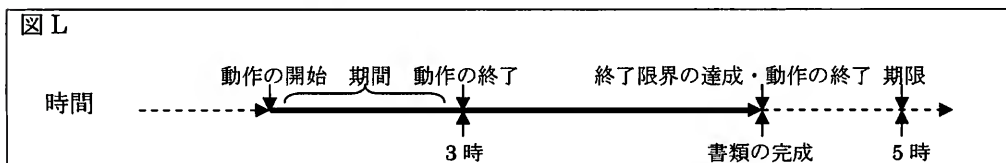
- (1) 5時^{まで}勉強する。(非内的限界動詞・主体動作動詞・G)

「勉強する」という、終了限界を内在しない動作が「5時」に終了することを表し得るのは、マデが動作の量を規定するために、その量を満たすことが動作の終了限界達成とみなされるからである。「期間」を表す述語は終了限界を内在しない動作・状態継続を表し、マデの示す点において、継続が終了することを表す。それは、「期間」を表すマデが、動作・状態の継続に終了限界を付与する働きをしているからである。

一方、「期限」を表す述語は、述語あるいは述語と文の成分の結びつきに終了限界を有している。そのため、「期限」を表すマデは、「期間」を表すマデのように述語の表す動作に終了限界を付与しているとは考えられない。このマデは、それ自体で終了限界に達し得る動作が、終了限界に達すると想定される最終時点を時間軸上に示す働きをしていると考えられる。

このことは、次のabの差にあらわれている。

- (23) a. 3時^{まで}書類を書く。
 b. 5時^{までに}書類を書く。



aは必ずしも「書類」の記入が全て済んでいなくともよい。それは、aの「期間」を表すマデは、開始限界を超えれば常に終了可能な動作継続の側面を取り出し、それに終了限界を付与するため、「書類」の完成という、対象との結びつきから得られる終了限界に先立って、動作を終了させることができるからである。一方、bは「書類」の記入が全て済んでいなくてはならない。それは、「期限」を表すマデは終了限界達成の最終時点を想定して示すため、「書類を書く」と

いう結びつきが有する終了限界達成の側面を取り出し、マデの示す時点に先行、あるいはそれと同時に、その終了限界が達成されることを表すからである。このように、「期間」を表す場合と「期限」を表す場合では、マデが述語の表す動作に終了限界を付与するか否かという点で異なっている。マデの働きが異なるからこそ、aは「書く」本来の限界性を有さない性質と連動して、それに終了限界を付与する「期間」を表し、bは「書類を書く」という対象との結びつきによって得られる限界性と連動し、その終了限界達成の最終時点を想定する「期限」を表すのである。

ところで、(23) では二の有無が「期間」と「期限」の意味の弁別に重要な役割を果たしている。では、時間名詞に接続する二の如何なる働きが意味の弁別に寄与しているのだろうか。「5時に始まる」「春に家を建てる」「7時にごはんを食べる」など、時間名詞に接続する二は、名詞の表す時間に幅があるか否か、また述語の表す動作が瞬間的か継続的かを問わず、動作の開始から終了までを捉えて時間軸に示しており、それが示す時点に動作が終了に至ることを表す。言い換えれば、述語の表す動作が終了に至る場合でなくては、二でその動作を行う時点を示すことができないといえる。そのため、二がないaでは「書く」の終了限界を内在しない側面が前面化し、マデは終了限界を付与する働きをする。これに対し、二のあるbでは「書類を書く」という結びつきから得られる終了限界達成の側面が前面化し、マデは終了限界を付与せず、単に終了限界達成の最終時点を想定して示す働きをする。時間名詞に接続する二は、述語の表す動作が終了に至ることのメルクマールとなる⁽¹⁹⁾。そのため、「書く」のように終了限界を有する動作と、そうでない動作のいずれも表し得る述語の場合には、その有無が、「期間」と「期限」の差を明らかにする役割を担う。

しかし、1節でも述べたように、二の有無が「期間」と「期限」という意味の差に常に対応するわけではない。次の(3)(4)は二を伴わずとも「期限」を表す場合である。

(3) 朝起きる[まで]三度も目が覚めた。(主体変化動詞・B2)

(4) あのCD絶対返してね。明日[まで]よ。(主体動作客体変化動詞・D)

(3)の「覚める」、(4)の「返す」はそもそも「期間」を表し得ない動詞である。また内的限界動詞であることから、動作が終了限界に達することが語彙的意味に含まれている。そのため、二がなくとも、マデは終了限界を付与することなく、動作の最終時点を想定して示す働きをし、「期限」を表すのであろう。つまり、(3)(4)は述語のアスペクト的性質と、それと連動したマデの働きのみによって「期限」を表しているのである。一方、次の(5)(6)は二を伴っていても「期間」を表し得る例である。

(5) 原子炉が停止する[まで]にかなりの水が漏れた。(主体動作動詞・G)

(6) 母親の帰宅[まで]に数時間子供を預かった。(主体動作客体変化動詞・E)

この(5)(6)は、実は二義的であり、「水が漏れた」「子供を預かった」という動作が継続した「期間」を表しているのとれる一方、「かなりの水が漏れた」「数時間子供を預かった」という動作

が達成された「期限」を表しているともとれる。「期間」の解釈が成り立つのは、(5)の「流れる」、(6)の「預かる」は維持動作の継続を表し、その継続には終了限界を内在しないため、マデによる終了限界の付与が可能だからである。一方、「期限」の解釈が成り立つのは、「かなり」「数時間」という量を表す語が共起し、動作の量が外的に限界づけられているためである。またこの外的に限界づけられていることが、動作が終了に至る場合でなくては時点を示し得ないニが共起する理由でもあろう。先行研究に言われるように、ニの有無のみが「期間」と「期限」の差に関わるのであれば、(5)(6)は二義的ではありえず「期限」の解釈しか成り立たないはずである。これらが二義的であり得るのは、動作継続の終了時と、外的限界づけによる動作の量を達成する時点が同じであり、また「期間」と「期限」の差が、ニの有無だけではなく、述語のアスペクト的性質、並びにそれと連動したマデの働きの相互作用によって生じているからである。

5. おわりに

述語の表す動作・状態にはいくつかの局面がある。時点を示すニの有無は、動作・状態の終了の局面を捉えるのか、継続の局面を捉えるのかを明示できることから、「期限」を示す場合にはニを伴うことが多く、「期間」を示す場合にはニを伴わないことが多い。しかし、「期間」と「期限」の差は、述語のアスペクト的性質と、それと連動したマデの働きの差によるものである⁽²⁰⁾。従って、「期間」を表すマデと「期限」を表すマデは、文中での働きが異なるものとして区別される。

【注】

- 1) (6)は「母親の帰宅」と同時に「預かる」という動作が終了する意と、「母親の帰宅」に至るまでのどこかの数時間だけ「預かる」ことをしたという意の2つを表す。(6)が「帰宅まで子供を預かった」と同様の「期間」を表し得るとするのは前者の解釈においてである。
- 2) もちろんニの有無が意味の差に全く影響しないというわけではなく、「5時 {まで/までに} 書く」のように、それが「期間」と「期限」の表し分けに重要な役割を担う場合もある。奥津(1966)、松木(1990)は、ニは一時点を示すため、その働きによってマデニという結びつきで「期限」を表すと述べる。しかし、述語の表す点的な動作の実現は、「期限」内の一時点とは限らず、(2)であれば、複数の人が「5時」に至る間、それぞれ異なる複数の時点に「提出する」場合もある(田野村2002)。ニは確かに一時点を示すものではあるが、そのことのみによって「期限」を表すことにつながるとは考え難い。ニの働きに関する本稿の考えは4節で述べる。
- 3) 永野が依拠する金田一(1947)の述語分類と、工藤の述語分類が表1のように対応するとの見方は、工藤(1995: 56-58)にある。工藤は、瞬間動詞が主体変化動詞に対応し、継続動詞が主体動作客体変化動詞と主体動作動詞に対応するとしている。しかし、金田一は瞬間動詞と継続動詞の両方にまたがる性質の動詞もあるとしており、厳密には表1のように対応しないところもある。
- 4) 工藤(1995: 232)はマデニと運動動詞の継続相が結びつく場合は、「パーフェクトの意味となってしまう」と述べる。「パーフェクト」とは、「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動

がひきつづき関わり、効力を持っていること」を表すと規定される（工藤1995：99）。確かに、継続相をとる「15日までに書類を書いていた。」は、設定時である「15日」に先行して「（書類を）書く」という出来事が起き、またその効力が「15日」においても捉えられるというパーフェクトを表す。ただし、これも「15日」に至る間のいずれかの時点において「書く」という動作が実現したことを表す点では完成相の場合と同じく「期限」を表すと言える。よって、表1では特にこれを区別しない。

- 5) 金水（2000：17）にも、「[「3時から5時まで」]のような成分で修飾できるのは（中略）非限界動詞に限られる」とある。なお、工藤（1995：233）は「野菜が崩れるまで、煮てしまった」という例をあげている。この「煮る」は、工藤（1995：73）で「主体動作・客体変化動詞〈内的限界動詞〉」に分類されており、「期間」を表すマデは内的限界動詞の完成相と結びつかないとする、工藤の主張に反している。この例にも明らかなように、非内的限界動詞だけではなく、内的限界動詞でも「期間」を表すことのできるものがある。この点について詳しくは3節で述べる。
- 6) 「誕生日の日にまでプレゼントをあげる」といった、極限的な意味として解釈すれば、(10)も許容される。また、「子供が30歳になるまでプレゼントをあげる」など、多回の動作を表す場合も許容される。ここでは、「あげる」が1回の動作の「期間」を表し得ないことを意味する。
- 7) 主体変化動詞で「期間」を表す場合、そのほとんどは継続相をとらなくてはならない。ただし、金田一（1947）が瞬間動詞と継続動詞にまたがるとする動詞は、「来週まで実家に帰る」「騒ぎがおさまるまで国に戻る」など、完成相で状態継続の「期間」を表すこともできる。
- 8) 状態性述語のうち、「いる」は「期限」を表す場合もあることが、寺村（1983）に指摘されている。

・3時^{まで}にここに居てくれ。（寺村1983：239（12）b）

寺村（1983：239）が述べるように、上の例は「ここに来て、居ることを始める」という意味を表している。「来ている」「帰っている」など、運動動詞の継続相が「存在様態」を表して存在文「いる」に近づく（野村2003）ことの裏返しとして、その様態が省略された「（来て）いる」「（帰って）いる」という存在文もあってよいはずである。つまり、「いる」という存在詞であっても、「期限」と結びつく場合のそれは、「来ている」「帰っている」という運動動詞の継続相と同様に捉えてよからう。従って、状態性述語は「期限」を表さないとする、永野（1964）、工藤（1995）の議論は、典型的な名詞述語文、形容詞述語文などを状態性述語とする場合、その結論を修正する必要はない。ただし、名詞述語文には様々な性質を有するものがあり、形容詞述語文などと性質を同じくするものに限られない。動詞から転生した名詞や漢語名詞など、運動動詞と類似したアスペクティブな性質を有するものもある（丹羽2008）。これらは、「夕方までにお戻りです」「昼までに完売だ」など、運動動詞と同じく「期限」を表し得る。また、変化の生起時が明確な結果状態を表す名詞述語にも、「期限」を表し得る場合がある。

・この店はいつも7時までには「客が多い」にぎやかだ/いっぱいだ。

「客が多い」「にぎやかだ」の表す状態は、程度修飾も可能な漸次的変化による結果状態であるのに対し、「いっぱいだ」は「満席になる」という瞬間的な変化の結果状態を表して、その変化の生じた時点を示すこともできる。同様に「3月までには20歳だ」と言えるのも、誕生日という変化の生じる瞬間が明らかな結果状態を表すからであろう。こうした名詞述語文の種々相については本稿では立ち入らず、典型的な名詞述語文に限って論じる。

- 9) (21) (22) のような非内的限界動詞は、そのままでは「期限」を表すことはできないものの、3.2で述べるように、「夕方までに1時間ほどぶらついた」など、量を表す語句によって外的に限界づけると、「期限」を表すことが可能となる。ただし、(19) (20) のように非内的限界動詞であっても量を表す語句による限界づけなしに「期限」を表し得るものもあることから、両者は区別する必要がある。
- 10) 注8にも述べたように、本稿でいう状態性述語は、典型的な名詞述語文、形容詞述語文などに限り、運動動詞に近い性質を有するものは含まない。
- 11) 工藤（1995：229）は、運動動詞と状態性述語（存在詞・形容詞・名詞述語）については言及しているものの、内的情態動詞については特に触れていない。内的情態動詞はGに属するものが多いが、「考える」のようにFに位置づけられるものも、また「*1時間安心する」「*10分驚いた」など、終了限界を外的に付与し難く、マデとなじみにくいものもある。金水（2000：27）にも指摘されているように、内的情態動詞として括られる中には、異なるアスペクティブな性質を有するものが存在しており、さらなる考察が必

要である。

- 12) 「再帰動詞」や「二側面動詞」などと呼ばれる動詞は、動作継続と状態継続のいずれも表す。
- 13) 工藤 (1995)、金水 (2000) は、主体変化動詞と主体動作客体変化動詞が終了限界を内在すると見る点で同じものの、内的限界動詞の規定は異なる。工藤 (1995: 72) は、「内的限界動詞」とは「そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界」を有する動詞とし、金水 (2000: 31) は、「限界動詞」とは「終了限界を超えなければ、運動が達成されたとは見なされない」動詞であるとする。「あてる」「あたためる」など、Eに分類される動詞は内的終了限界の達成と同時に「尽きるべき」動作を表すわけではなく、厳密には工藤の「内的限界動詞」の規定にはあてはまらないのではないだろうか。内的限界動詞の中には、内的終了限界達成と同時に動作が終了するものと、そうでないものがあること、また、主体動作客体変化動詞と主体動作動詞の表す動作継続は、その質に2つのタイプがあることに留意する必要がある。なお、主体動作客体変化動詞と主体動作動詞の表す動作継続の質を分類する上で、仁田 (1983, 1997)、森山 (1983, 1988) の述べる「持続性」という概念が参考となる。この「持続性」を有する動詞は、局面動詞「～つづける」と結びつき得るとされる。「期間」を表し難い主体動作客体変化動詞は「-持続性」であるのに対し、「期間」を表し得る主体動作客体変化動詞と主体動作動詞は「+持続性」であり、また「～つづける」との共起によって取り出される動作継続の質も同じといえる。ただし、動作継続の「期間」を表さない主体変化動詞の中にも「(競争力が) 衰えつづける」「荒れつづける」など「+持続性」の動詞があり、この概念のみで動作継続の「期間」を表すか否かを説明することはできない。
- 14) 動作継続を表す主体動作動詞と主体動作客体変化動詞は、それが「期間」を表し得るか否かにかかわらず、常に動作の終了時は明確である。「勉強する」はそれをやめて新しい動作を開始することが、「あてる」であれば「外す」ことが、「殺す」であれば「対象の死」が、それぞれ動作の終了時であると明確に捉えられる。
- 15) 量を表す語句による外的限界づけなしに「期限」を表し得る非内的限界動詞は、局面動詞「～終わる」と結びつき得る「完結性」(仁田1983, 1997)、あるいは「終結性」(森山1983)を有する動詞が多く、非内的限界動詞を下位分類する際には、仁田、森山の提示する観点が参考となる。ただし、「完結性」「終結性」がなくとも、「待つ」「考える」など、量を表す語句なしに「期限」を表し得る非内的限界動詞もある。また内的限界動詞にも「点く」「死ぬ」など、「完結性」「終結性」がなくとも「期限」を表し得るものが多く、「完結性」「終結性」の有無だけでは「期限」を表し得るか否かを説明することはできない。なお、非内的限界動詞が対象との結びつきによって、限界性を有する場合があるという本稿と同様の主張は、Vendler (1967)、森山 (1983)、仁田 (1997)、上野・影山 (2001) にもある。
- 16) Gに属す動詞であっても、実際の発話では「夕方までに公園をぶらついた」「晩ご飯までに勉強した」など、量を表す語句を共起させずに「期限」を表す場合がある。それは「公園をぶらつく」は“公園を一周することである”、“勉強する”は“宿題を終わらせることである”など、話し手が言明しないままに動作の量を想定しているためである。やはりGは外的に動作の量が規定されなくては「期限」を表し難い。
- 17) 状態性述語には「時間的限定性」(八亀2008)のあるものもあるが、この状態性述語における「時間的限定性」は、運動動詞がその語彙の意味や文中の成分との結びつきにもつ限界性とは別である。このことは、八亀 (2008: 21) が「時間的限定性」について、「時間的限界性とはまったく異なる」と述べている通りである。ちなみに、状態性述語における「時間的限定性」の有無は、本稿では3.1.2で見た「状態継続の終了余地」の有無がそれに対応する。
- 18) 表2'は「期間」と「期限」を表し得るか否かという観点から述語を分類したものである。動作継続の「期間」は終了限界を内在しない動作継続が終了に至る局面を、状態継続の「期間」は変化の結果後の局面を、「期限」は限界性を有する動作の終了の局面を、それぞれ問う。そのため、「期間」と「期限」を表すか否かによって、開始限界から内的終了限界に至る局面は問題とならないことから、その差異は表に反映されていない。この局面に着目した場合、Cであれば、開始限界から終了限界に至る間に、一定時間動作が継続する「行く」「帰る」などと、瞬間的に動作が終了する「点く」「消える」などがあり、両者を区別する必要があるが(金田一1947、藪崎2009)、その別は本稿の目的には直接関わらないため、

表に示していない。工藤（1995）、金水（2000）の動詞分類は、注13、15にも述べたように、仁田（1983、1997）、森山（1983、1988）が提示する観点を取り入れることで、さらに精密化できると考えるが、それは今後の課題である。

参考までに、表2'に示したA～Iの述語の性質を、次に説明しておく。

- A：終了限界を内在するものの、その達成時が明確ではない（「腐る」であれば、新鮮な状態から「腐った」状態への変化が漸次的なため、いつ「腐った」のか、その瞬間の時点を示し難い）。内的終了限界達成後の結果状態は進展性を有し（「ちょっと腐っている」「かなり腐っている」などと、終了限界達成後の状態の進展具合を示すことができる）、状態継続に終了する余地がない。
- B：終了限界を内在し、その達成時は明確である。終了限界達成による結果状態の継続の有り様から、BはB1とB2に分けられる。B1は結果状態が継続し続け、終了する余地がない（一度死んだら生き返ることはない）。B2は結果状態の継続に終了する余地はあるものの、その終了時は明確ではない（始まりには終わりはあるものの、「始まっている」状態は終わる直前まで継続するわけではない）。
- C：終了限界を内在し、その達成時が明確である。また、終了限界達成による結果状態の継続に終了する余地があり、かつその終了時が明確である。
- D：終了限界を内在し、その達成時が明確である。開始限界から終了限界に至る動作継続を表すが、終了限界達成と同時にその動作は終了し、多回的でない限り、それ以上その動作が継続することはない。
- E：終了限界を内在し、その達成時が明確である。開始限界から終了限界に至る動作継続を表すだけでなく、終了限界達成後も動作を維持することができ、内的終了限界達成時とは別の動作の終了時を有し得る。
- F：動詞自体には終了限界を内在せず、繰り返しの動作を維持する動作継続を表す。ただし、必須成分と結びつくことで終了限界を有することもでき、その終了限界達成時は明確である。
- G：動詞自体には終了限界を内在せず、繰り返しの動作を維持する動作継続を表す。量を表す語句によって外的に限界づけられない限り、終了限界を有し得ない。
- H：一時的状態を表す。変化によって新たな状態を獲得した時点でその状態は終了するため、状態継続には終了する余地があり、かつその終了時が明確である。
- I：恒常的状态を表す。そのため、一度獲得されたその状態は継続し続け、終了する余地がない。
- なお、マデの表す「期間」と同じく、動作・状態継続の時間を限定する「間」と「前」、そして「期限」と同じく点的動作の実現の時間を限定する「間に」と「前に」といった語句も、結びつく述語の性質は、マデの「期間」「期限」の場合と平行的に捉えられる。
- A：*留守にしている間腐っていた。留守にしている間に {?腐った/腐っていた}。
*出荷する前腐っていた。出荷する前に {?腐った/腐っていた}。
- B1：*病院に駆けつける間死んでいた。病院に駆けつける間に {死んだ/死んでいた}。
*病院に着く前死んでいた。病院に着く前に {死んだ/死んでいた}。
- B2：*社長がいない間会議が始まっていた。社長がいない間に会議が {始まった/始まっていた}。
*社長が来る前会議が始まっていた。社長が来る前に会議が {始まった/始まっていた}。
- C：1時間もの間電気が点いていた。1時間もの間に電気が点いた。
1時間前（は）電気が点いていた。1時間前に電気が点いた。
- D：*警察が急行する間殺した。警察が急行する間に殺した。
*警察が到着する前殺した。警察が到着する前に殺した。
- E：前菜を食べる間スープをあたためた。前菜を食べる間にスープをあたためた。
肉を焼く前（は）スープをあたためた。肉を焼く前にスープをあたためた。
- F：子供が寝ている間手紙を書いた。子供が寝ている間に手紙を書いた。
子供が起きる前（は）手紙を書いた。子供が起きる前に手紙を書いた。
- G：日が出ている間ぶらぶらする。??日が出ている間にぶらぶらする。
日が沈む前（は）ぶらぶらする。??日が沈む前にぶらぶらする。
- H：店があいている間（は）この通りは明るい。*店があいている間にこの通りは明るい。

店がしまる前(は)この通りは明るい。 *店がしまる前にこの通りは明るい。

I : *生きている間長男だ。 *生きている間に長男だ。

*死ぬ前長男だ。 *死ぬ前に長男だ。

ただし、寺村(1983: 245-246)にも指摘されるように、「父は戦争が終る {?までに/前に} 亡くなりました」など、マデと他の語句による時間限定には異なるところもある。時間限定に関わる語句の差異については、今後考えたい。

- 19) 時間名詞に接続する二には「11時には寝ていた」のように、述語の表す効力が捉えられる時点を示す場合もあり、常に動作の開始から終了までを捉えて時間軸に示すというわけではない。しかし、こうしたパーフェクトの意味であっても、二の示す時間以前に動作は終了に至っており、時点を示す二がある場合には、述語の表す動作が終了に至ることを含意していると言える。
- 20) 英語の“till” “by”のように、「期間」と「期限」の差を語によって区別する言語もあるが、朝鮮語では“까지 (kkaji)”という日本語のマデにほぼ相当する一語で「期間」と「期限」のいずれも表す。朝鮮語の述語のアスペクト的性質と時間限定のあり方については、今後詳しく分析する必要があるが、朝鮮語では日本語の二に相当する成分無しに「期間」と「期限」を表し分けられることに鑑みても、「期間」と「期限」の差にとって重要なのは述語のアスペクト的性質とマデの働きの差であり、二の働きは補助的なものと考えられる。

【引用文献】

- 上野誠司、影山太郎(2001)「移動と経路の表現」『日英対照 動詞の意味と構文』pp.40-68,大修館書店
 奥津敬一郎(1966)「「マデ」「マデニ」「カラ」一順序助詞を中心として」『日本語教育』9,pp.2-23
 金水敏(2000)「時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』pp.1-92,岩波書店
 金田一春彦(1947)「国語動詞の一分類」(『日本語動詞のアスペクト』(1976)むぎ書房所収)
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
 田野村忠温(2002)「辞と複合辞」『日本語学と言語学』pp.49-60,明治書院
 寺村秀夫(1983)「時間的限定の意味と文法的機能」『副用語の研究』pp.233-266,明治書院
 永野賢(1964)「「まで」と「までに」」『口語文法講座3 ゆれている文法』pp.264-273,明治書院
 仁田義雄(1983)「動詞とアスペクト—語彙論的統語論の観点から—」『計量国語学』14-3,pp.113-128
 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
 丹羽哲也(2008)「動詞の敬語形「お/ご〜だ」のテンス・アスペクト」『文学史研究』48,pp.67-76,大阪市立大学
 野村剛史(2003)「存在の様態—シテイルについて—」『国語国文』72-8,pp.1-20,京都大学
 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2, pp.27-52,早稲田大学
 森山卓郎(1983)「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢』17,pp.1-22,大阪大学
 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
 八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院
 藪崎淳子(2009)「「格助詞マデ」の副助詞性について」『日本語文法』9-2,pp.70-87
 Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press

【2011年9月6日受付, 10月25日受理】

The *Made* expressing Time Duration and the *Made* expressing Time Limit

Yabuzaki Junko

Through the use of the Japanese particle *Made*, there are two modes to express the qualification of time. For instance, on the one hand, the *Made* in the sentence “5 *ji made* *benkyo suru* (5時まで勉強する)” indicates the continuous duration of time of the action “*benkyo suru* (勉強する)” ; on the other hand, the *Made* in the sentence “5 *ji made ni teisyutsu suru* (5時までに提出する)” denotes the realizing limit of time of the momentary action “*teisyutsu suru* (提出する)”. Concerning the semantic difference between the above-mentioned time duration and time limit, some arguments tend to attribute the causes to the presence of the particle *Ni* only, and suppose that the particle *Made* in the two cases have the same function. As regards the issue, this paper attempts to expound that, in addition to the presence of *Ni*, the causes of the above semantic difference between time duration and time limit are also related to the aspectual quality of the predicate and its interaction with the different functions of the corresponding *Made*.